

## 実践報告

# 地域住民に対するものづくり講座 —ものづくりを通して健康になれる地域を目指して—

高木雅之, 吉川ひろみ, 古山千佳子

県立広島大学保健福祉学部作業療法学科

要旨：地域住民を対象に健康増進のためのものづくり講座を開催した。講座は1回2時間で計5回実施された。受講者は、延べ50名で60～70代が多かった。受講者は、陶芸、籐細工、木工・木彫を選択し行った。質問紙と観察を用いて、講座の成果を明らかにした。その結果、受講者はものづくりをすることで、楽しさや達成感を味わい、ものづくりへの興味と意欲を向上させ、自尊心を維持し、日々のストレスを調整していたことがわかった。また受講者は、講座を通して知人を増やし、他者との関係を深めていたことが明らかとなった。講座終了後、受講者ともものづくりグループを発足させた。受講者以外の住民も活動に参加するようになり、作業種目も増え、グループは地域の人々が気軽にものづくりを楽しめる場へと発展した。本講座は受講者の精神的、社会的健康を増進させ、住民のものづくりのニーズを満たす環境作りに貢献したと考えられる。

作業科学研究, 7, 19-26, 2013.

キーワード：ものづくり, 健康増進, 地域づくり, 公開講座

## Practical Report

### **Public craft workshops for community residents: creating community to promote health through engaging in crafts**

Masayuki TAKAGI, Hiromi YOSHIKAWA, Chikako KOYAMA

Department of Occupational Therapy, Prefectural University of Hiroshima

We held public workshops about craft for community residents to promote their health. This paper describes the outline and outcomes of the workshops. The workshops consisted of five sessions of two hours. The total number of participants attending the five sessions was fifty. Most of them were in their 60s or 70s. Participants chose a craft activity and engaged in pottery, canework or woodwork. They produced items such as dishes, baskets, and freestanding signboards. Outcomes of the workshops were measured by a questionnaire and researcher's observations. The results from the questionnaire and the observations showed that they enjoyed crafts, gained a sense of achievement, increased their interest and skills in crafts, maintained their self-esteem, and controlled daily stress through engaging in crafts. Furthermore, it was shown that they built new social relationships and strengthened existing social relationships in the workshops. After the workshops, a craft group including participants in the workshop among its members was established. Community residents besides participants in the workshop attended the group and the types of crafts in the group increased. The group developed into a place where residents were able to readily enjoy crafts. The workshops helped to promote participants' mental and social well-being, and to create a supportive environment able to satisfy residents' creative needs.

Japanese Journal of Occupational Science, 7, 19-26, 2013.

Key words: crafts, health promotion, community development, public workshops

## はじめに

ものづくりという用語は、もともと農業や農業従事者を指す物作り（ものづくり）が変化し、製造業を指す言葉として1990年代後半から急速にメディアや書籍で用いられるようになった（日経ビジネスオンライン, 2011）。現在では産業や行政の分野で広く使われているが、その定義は曖昧である。大辞泉では、ものづくりを「物を作ること。特に、熟練した技術者がその優れた技術で精妙を極めた物を作ること」と定義している。この定義では、ものづくりは職人と呼ばれるような高い技術を持つ者が行う作業である印象が強い。また製造業において、ものづくりは「人間社会の利便性向上を目的に人工的にものを発想・設計・製造・使用・廃棄・回収・再利用する一連のプロセスおよびその組織的活動」（日本学術会議機械工学委員会生産科学分科会, 2008）や「設計情報をモノに作り込み、それを良い流れで顧客まで届けること」（藤本ら, 2009）と定義づけられている。両定義では、ものづくりを単にものを作るという活動に限るのではなく、作ったものの流通・販売・使用・廃棄・再利用というプロセスまで含んだ活動であると捉えている。ものづくりにどのような活動が含まれるかは、それを行う個人の主観やそれが行われる文脈によって異なる（吉川, 2008）。そこで本論では、ものづくりを「ものを作る一連の活動」と定義し、ものづくりに含まれる活動やそれを行う者を限定せず、多様な個人や文脈に合うようにした。

ものづくりは作り手の年齢や障害の有無に関わらず、作り手の健康に良い影響を与えることが明らかとなっている。Perruzza と Kinsella (2010) は障害や疾病を持つ者に対する創造的な活動の治療的効果を明らかにするために2000年から2008年に発行された査読つき論文のレビューを行った。レビューされた23論文うち、精神疾患患者を対象にしたものが10論文、がん患者を対象にしたものが5論文、関節炎や多発性硬化症などの慢性疾患患者を対象にしたものが5論文、腎臓病患者と緩和病棟の患者を対象にしたものが各1論文であった。研究対象者の年齢別にみると、成人から高齢者までを対象としたものが19論文、高齢者だけを対象にしたものが1論文、子どもを対象にしたものが1論文、多様な年齢のもの対象としたものが1論文、年齢がわからないものが1論文であった。レビューから創造的活動は、生活をコントロールしているという感覚の向上、自分らしさの構築、自己表現の機会の提供、病気の経験をポジティブなものへ転換すること、生きている目的や意味の獲得、人間関係の構築に貢献していることが明らかになった。

健常者を対象に、ものづくりが健康に与える影響につ

いて調査した研究もある。Tzanidaki と Reynolds (2011) や Beddings (2008) は、ものづくりを行っている高齢者にインタビューを行い、ものづくりの意味や健康への影響を明らかにした。Dickie (2003, 2011) や Riley (2008) は、参与観察とインタビューなどを併用し、ものづくりが作り手に与える治療的効果やアイデンティティの形成に与える影響を調査した。Pollanen (2013) は成人のものづくり経験についての記述を分析し、健康に影響を与える活動としてものづくりはどのように捉えられているかを明らかにした。これらの研究よってものづくりは、楽しさ、満足感、達成感の獲得(Beddings 他, 2008, Pollanens, 2013, Tzanidaki 他, 2011)、ポジティブな自己イメージの形成(Beddings 他, 2008, Dickie, 2003, Pollanens, 2013, Riley, 2008, Tzanidaki 他, 2011)、困難な出来事やネガティブな感情への対処(Beddings 他, 2008, Dickie, 2011, Pollanens, 2013, Tzanidaki 他, 2011)、生活リズムの構築(Dickie, 2011, Pollanens, 2013)、人間関係の構築(Tzanidaki 他, 2011)に貢献することが明らかとなっている。

ものづくりは作業療法や芸術療法において、疾病や障害に対する治療手段の1つとして用いられてきた(Perruzza 他, 2010)。健康な人々に対してもものづくりを応用した実践としては、オーストラリアで行われているメンズシェドプログラムがある。このプログラムは、地域に住む高齢男性の心理社会的健康と安寧を促進させることを目的としたヘルスプロモーションの先進的な取り組みである(Ballinger 他, 2009)。メンズシェドとは男性たちが集い、ものづくりをする小屋のことである。男性たちはメンズシェドで、木工や金工といった活動を通して、ものづくりの技能を高め、自尊心や達成感を獲得し、人間関係を発展させている(Ballinger 他, 2009, Fildes 他, 2010, Ormsby 他, 2010)。メンズシェドプログラムのように、地域住民の健康増進を目的にものづくりを用いた研究はほとんどない。今回、地域住民を対象に健康増進のためのものづくり講座を開催したので、その概要と成果を報告する。

## 講座の概要

A市の住民を対象に、「ものづくりと健康づくり」と題した講座を実施した。講座の目的は、①受講者がものづくりを通して健康になること、②受講者がものづくりを通して地域に貢献する方法を考えることであった。講座は1回2時間として、2012年8月～10月の間にシリーズで計5回開催した(表1)。場所はA市内の大学の木工室と陶芸室を使用した。参加費は無料で、材料費は原則

表1 講座の詳細

回数	日付	内容	受講者数
1回目	8月25日	ものづくりと健康増進と地域貢献の関係について学習する。 どの作業を行うか決め、グループを作る。 作りたいものと必要な材料を考える。	8
2回目	9月8日	作品を作り始める。	12
3回目	9月22日	作品の続きを作る。	12
4回目	10月13日	作品を完成させる。	8
5回目	10月27日	作品を発表する。 ものづくりが自身の健康に及ぼした影響について振り返る。 ものづくりを通して地域に貢献する方法を考える。	10

表2 3回以上受講した者の詳細

受講者	年齢	性別	ものづくりの経験	行ったものづくり	完成させた作品	受講回数
A	60代	男	木工, 陶芸	陶芸	皿	5
B	60代	男	木工, 電子工作, プラモデル	陶芸	表札, 皿	5
C	70代	女	編み物	陶芸	地蔵	4
D	70代	男	カルトナーージュ, 箱作り, 製本・表装	陶芸	植木鉢, すずり	5
E	30代	女	編み物, ミサマガづくり	陶芸	置物, 皿	4
F	幼児	男	ぬりえ	陶芸	置物	4
G	60代	男	木工, 鉄工	陶芸, 木彫	表札, 金剛力士像	5
H	60代	男	木工, 鉄工	木工・木彫	看板	4
I	70代	女	編み物, 陶芸	木工・木彫	踏み台	4
J	80代	女	編み物, 籐細工	籐細工	籠	3

自己負担とし、大学にある道具や不要な木材や粘土は無償で提供された。

講座の対象は、ものづくりに興味がある者とし、受講者の公募は、市が発行している広報等により行った。本講座を受講した者は、1回目8名、2回目12名、3回目12名、4回目8名、5回目10名で、延べ50名であった。5回すべて受講した者は4名、4回受講した者は5名、3回受講した者は1名、2回受講した者が2名、1回受講した者は3名であった。5回の講座のうち3回以上受講した者の詳細を表2に示した。3回以上受講した者10名の内訳は、男性が6名、女性が4名で、60～70代の受講者が多かった。彼らがこれまでに経験したことのあるものづくりとしては、木工、編み物、陶芸、鉄工が多かった。

本講座で行われたものづくりには、受講者の健康を増進するための4つの特徴があった。1つ目は、自分が作りたいものを作るということであった。興味があるものづくりをしたり、自分に必要なものを作ったりすることで、モチベーションや集中力が高まり、受講者はものづくりをより楽しめるのではないかと考えた。2つ目の特徴は、

みんなで集まって作るということであった。作るものは違っても他者と集まってものづくりをすることで、新しい人間関係ができたり、協力しより良いものができたり、他のものづくりへの興味が生まれたりする効果を期待した。3つ目は、作品を1つ以上完成させるということであった。作品を完成させることで、達成感や満足感を得られると考えた。4つ目は、出来上がったものを披露するというであった。作品の発表会を行い、他者から自分の作品を褒められることによって、自信や自尊心が高まることを期待した。これらの特徴は、著者の経験および先行研究の結果を参考に考え出された (Ballinger, 2009, Bedding 他, 2008, Griffiths, 2008, Reynolds, 1997, 2000, Reynolds 他, 2003, 高木他, 2012, Tzanidaki & Reynolds, 2011)。

次に講座の流れを説明する。講座1回目は、講座の目的およびものづくりと健康増進と地域貢献の関係を説明し、受講者のものづくりの経験と興味を共有した。そして、受講者はどの作業を行うか決定し、作業グループを作り、作りたいものと必要な材料を考えた。今回の講座

では、木彫・木工、陶芸、籐細工の3つの作業グループができた。作りたいものとしては、木彫・木工では踏み台や看板、陶芸では皿や地蔵、籐細工では籠などが挙げられた。

2回目以降は、受講者それぞれが作りたいものを製作した。各作業グループ内にいる経験者が他者にやり方を教えたり、他者の難しいところを援助し、受講者同士が協力し合っものづくりを行った。例えば、木工に熟練した受講者が、木工を初めて行う受講者に木材の加工方法や道具の使い方をアドバイスした。受講者が自宅で作業の続きをできる場合、材料や道具を持ち帰り、次の講座までに自宅で作業を進めた。受講者の中には自宅で長時間作業し、作品を完成させた者もいた。

5回目には、作品の発表会を行った。発表会では、全員の作品を展示し、各自が自由に作品を観て回った後、受講者一人ひとりが創作の経緯や感想を発表した。作品の発表会后、筆者が受講者と共に、講座での経験を振り返り、ものづくりと健康増進の関係についてまとめた。最後に、受講者はものづくりを通して地域に貢献する方法を考えた。

### データの収集と分析

講座の成果を明らかにするために、観察と質問紙が用いられた。筆頭著者が講座中の受講者の言動を観察し、観察記録を作成した。質問紙は講座終了時に配布した。質問紙では、講座を通して「楽しいと感じた」、「達成感を得られた」、「ものづくりへの興味が増した」、「知人が増えた」、「他者との関係が深まった」、「ものづくりの技能・知識が向上した」の計6項目について、「そう思う」、「やや思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の4段階で回答を求めた。また受講した感想を自由に記述してもらった。

データの分析では、筆頭著者が観察記録と質問紙の自由記述欄に書かれた文章を、内容の類似性に従って分類した。次に分類されたまとまりに名前をつけ、講座の成果とした。また質問紙の6つの閉鎖的質問については、それぞれの項目に対する回答の合計を出した。

倫理的配慮として、講座開始時に、本研究の目的と方法、得た情報を研究以外の目的で使用しないこと、プライバシーを守ること、研究に協力しなくても不利益を被らないことを口頭と書面にて受講者に説明し、研究協力への同意が得られた者のみからデータを収集した。なお、本研究は県立広島大学研究倫理委員会の承認（第12NH016号）を得て実施した。

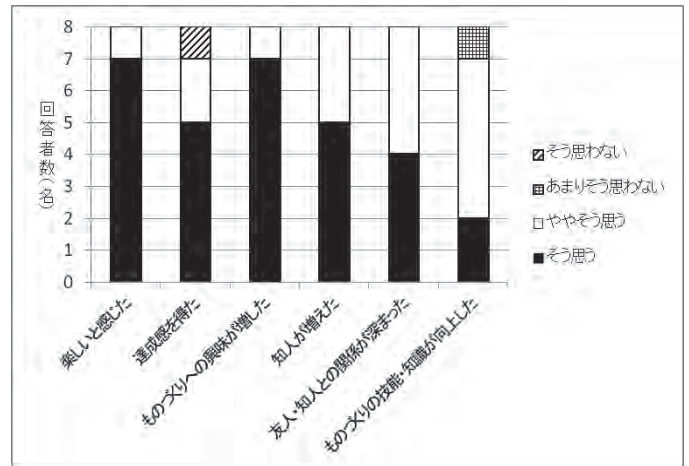


図1 質問紙の回答結果

### 講座の成果

5回のうち4回以上受講した8名（表2のFさんとJさんを除いた者）が質問紙に回答した。質問紙の回答結果は、図1に示した。講座中の受講者の語りや様子および質問紙の回答結果から、①楽しさの実感、②満足感・達成感の獲得、③ものづくりへの興味・意欲の向上、④ストレスの調整、⑤自尊心の維持、⑥人間関係の発展、⑦ものづくりの知識の向上、⑧ものづくりができる場の増加、という8つの成果があがった。次に、受講者の語りや様子、質問紙の回答結果を示しながら、各成果について具体的に説明する。

#### 1. 楽しさの実感

受講者らは、ものができていく過程や他者との交流を楽しんでいた。講座を通して楽しいと感じたという質問紙の項目について、すべての受講者がそう思う、あるいはややそう思うと回答した。受講者のEさんは、息子と講座に参加し、初めて陶芸を経験した。Eさんは家族で使える大きな皿と息子のためにアニメのキャラクターの置物を作った。息子のFさんは粘土を水に溶かしたり、のべ棒で伸ばしたりして遊び、ドリルの形をした置物を完成させた。Eさんは陶芸を通して感じた楽しさを次のように表現した。

初めて陶芸ができて良かった。子供も粘土をするのは好きなので楽しくやれて、親子で参加して良かった。・・・本焼きでどんな色がでるか楽しみだった。焼きあがりには思った色とは違ったけど、いい色が出たと思う。

#### 2. 満足感・達成感の獲得

受講者らは、自らが完成させた作品に満足していた。また自宅で自分が作ったものを使うことでも満足感を得





図2 Gさんの金剛力士像

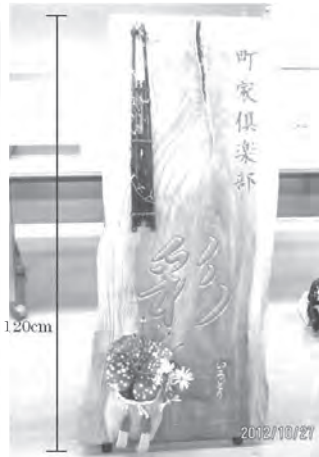


図3 Hさんの看板

ていた。講座を通して達成感を得たという質問紙の項目については、8名中7名がそう思う、あるいはややそう思うと回答した。受講者のIさんは、自宅のあがりかまちを楽に昇り降りするために、踏み台を作製した。Iさんはこれまで陶芸や編み物、裁縫の経験はあったが、木工するのは初めてであった。Iさんは他者から木工の機械の使い方や木材に模様を彫る方法を教えてもらいながら、踏み台を完成させた。Iさんは木工で得た満足感や達成感について次のように述べた。

今まで手がけたことがないものづくりに挑戦できた喜びがあった。・・・昇降盤やドリルの虜になった。・・・出来上がった踏み台を毎日使う喜びは大きい。我が家で一番役に立つと思う。波及効果で、他のものを作ってみたいという気持ちが出てきた。今度は、三角棚を作ってみたい。

### 3. ものづくりへの興味・意欲の向上

受講者らは、今回の講座がきっかけとなり、ものづくりへの興味が高まり、もっと作品を作りたいという気持ちや作品を出展したいという気持ちを持つようになった。講座を通してものづくりへの興味が増したという質問紙の項目について、すべての受講者がそう思う、あるいはややそう思うと回答した。受講者のGさんは、これまでに木工や鉄工で廃材を利用し、棚や作業台、椅子、ロッカーを作った経験があった。本講座では、以前から興味のあった木彫に挑戦し、金剛力士像を完成させた(図2)。Gさんは、今回の経験を通して、もっと木彫の技能を高め、大作を作りたいという意欲を持った。

木彫をしたのは小学生以来だった。やり方は勉強せずに自分の感性で作った。朝8時から夜の8時まで、こもって作業をすることもあった。途中でなんでこんなこと

してるんやろうと思うことあったが、やっていくうちにやり遂げたいという気持ちがでて、興味に引き込まれた。みんなに自分の作品を楽しんでもらえて良かった。これを契機にもう少し大きいもので細かいものに挑戦したい。来年は市美展に作品を出したい。講座を通して前向きに挑戦する気持ちが湧いてきた。

### 4. ストレスの調整

受講者らはものづくりに没頭することで、気分転換を図っていた。Aさんは、以前に陶芸教室に参加したことがあり、陶芸に興味を持っていた。今回の講座では、地蔵の置物と皿を作ろうとしたが、置物は素焼きの際に割れてしまった。Aさんは陶芸をすることがストレスの調整に役立ったことを述べた。

自分は不器用で、1つ目のお地蔵さんは素焼きで割れてしまった。2つ目はさんまを乗せるための皿を作ったが、思ったより良くできたのでさんまより高級な魚を乗せたい。怪我の巧名で良い作品になった。陶芸は思わぬ結果がでるところがいい。陶芸に集中していると、いろんなことを忘れられ、息抜きになった。ものづくりをしている時間は雑念が消えて、楽しく作業することができた。普段使っていない思考回路を使うことで、頭がリフレッシュされるように感じた。ものを作る楽しさを味わった。やればできるという思いになった。

### 5. 自尊心の維持

受講者らは、満足いくものを完成させること、他者がものを作るのを助けること、他者から作ったものを称賛されることによって、自尊心を維持していた。Hさんは、必要なものはできる限り自分で作りたいと考え、これまでにキャノピー、テーブル、鉄塔などを作った経験があった。今回は、自宅でパーティーなどを開催する際に玄関に飾る看板を作った(図3)。Hさんは多くの時間と費用を要し、作品を完成させた。作品発表会では、製作工程を誇らしげに語り、自尊心を表現した。

看板を製作するのに100時間くらいかかった。特に構想を練ったり、部品を選ぶのに時間がかかった。構想を練るために、尾道に看板の現物を3回見に行った。途中、道具が足らなくなり、道具も買い足した。・・・彫る文字の形を決めるため、見本を50枚印刷し、その中から気に入ったものを1つ選んだ。看板に掘った「彩」はアクリル絵の具を使用して塗った。「町家倶楽部」はベンガラを使った。塗装は全部で3回行った。・・・自分にプレッシャーをかけて有言実行した。出来にまあまあ満足している。ものづくりは大変だが、少しずつ実行することによ

り、目標を達成することができる。

## 6. 人間関係の発展

本講座は、受講者らが地域の人々と出会う機会となった。また知人と一緒に参加した受講者らにとっては、知人との関係を深める効果があった。講座を通して知人が増えた、友人・知人との関係が深まったという質問紙の項目において、すべての受講者がそう思う、あるいはややそう思うと回答した。実際に、Cさんは「新しい出会いが嬉しかった。皆さんとの交流が深められたのが大そう良かった。」と述べた。

## 7. ものづくりの知識・技能の向上

受講者らは他者やインターネットから道具の使い方や作り方について学習していた。また実際にものづくりをすることを通して、ものづくりの知識・技能を高めていた。例えば、木彫に初めて挑戦したHさんは、地域のお店に置いてある看板を見に行ったり、インターネットで動画を見たりして、看板の作り方を研究した。またAさんは「焼くと思った以上に作品が小さくなるのがわかった」と述べ、実際に陶芸をすることで知識を得ていた。講座を通してものづくりの技能・知識が向上したという質問紙の項目について、8名中7名がそう思う、あるいはややそう思うと回答した。

## 8. ものづくりを楽しめる地域資源への発展

講座5回目にもものづくりを通して地域に貢献する方法を考えた際、廃材を利用したものづくりにより自然環境の保護を推進すること、地域の人々にもものづくりを教えることにより住民の技能を高めることなどが提案された。また、地域の人々が気軽に集まってものづくりを楽しめる場があることが、地域の資源になるのではないかという意見も出た。話し合いの結果、①地域にもものづくりを楽しめる場を作ること、②自らのものづくり技能を高めながら、地域に貢献していく方法を模索することを目的に、本講座終了後もものづくり活動を続けることになった。

講座終了後、受講者11名が月2回定期的に大学に集まり、ものづくり活動を継続した。受講者らは自分の家族や友人を活動に誘い、新たな参加者が加わり、2013年3月現在では18名が活動している。受講者は新しい参加者に陶芸や籐細工を教えたり、新たな作業に挑戦した。また活動に加わった参加者が新しい作業をグループ内に広めた。現在は、木彫・木工、陶芸、籐細工に加え、紙バンド手芸、革細工、編み物も行われている。講座は地域

住民にとってものづくりを楽しめる場へと発展している。

## 考察

### 1. ものづくりを通しての健康増進

今回のものづくり講座は、受講者が楽しさや達成感を味わい、日々のストレスを調整し、自尊心を保ち、ものづくりに関する興味と技能を高めることに貢献した。また受講者は講座を通して知人を増やし、他者との関係を深めた。オーストラリアにおいて、ものづくりを通して高齢者の健康増進を図っているメンズシェドプログラムでも本講座と同様な成果がみられている。Ballingerら(2009)やFildesら(2010)の研究は、メンズシェドプログラムが健康に与える影響について調査し、参加者は達成感や自信を獲得し、ものづくりの技術と興味を高め、人間関係を広げていることを明らかにした。これらの研究結果と本講座の成果から、地域の高齢者が集まってものづくりを行うことは、かれらの精神的、社会的健康の増進に寄与するといえる。

ものづくりが健康に与える影響に関する他の先行研究においても、本講座の成果と同様に、ものづくりは楽しさや達成感といったポジティブな感情を引き起こすこと、ストレスの調整、自尊心の維持、人間関係の発展に貢献することが明らかとなっている。TzanidakとReynolds(2011)は、ギリシアのクレタ島に住む高齢女性12名にインタビューを行い、伝統的なものづくりが健康に与える影響を明らかにした。女性たちはものづくりを通して楽しさ、満足感、有能感といった感情や過去から一貫性のある自己を経験し、他者とのつながりを構築していた。また作ったものを売ることによって社会における自分の価値を保ったり、ものづくりをすることで身体的な痛みや配偶者と死別した悲しみなどの人生の困難に対処していた。Pollanen(2012)は、ものづくりを行っている16歳から84歳の92名からものづくりの意味についての記述を集め、ものづくりが作り手の安寧にどのような影響があるかを調べた。その結果、ものづくりは日々の生活のリズムを作り、自尊心や自信を高め、アイデンティティを発達させ、ストレス時期には逃避や自己防衛の手段となることがわかった。本講座の成果はこれらの研究結果の一部と合致している。しかし、生活リズムの構築、人生における困難への対処といった影響は、本講座の成果として現れなかった。その理由として、講座が3ヵ月間、隔週に1回という短期間、低頻度であったことが考えられる。両研究では対象者の過去の経験すべてからものづくりの影響を探っているが、本論では講座におけるものづくりの経験のみを研究対象のデータとした。今後、集ま

つものづくりを行う頻度を増やし、継続して参加者のものづくりの経験を調査することで、本講座ではみられなかった影響も明らかになるかもしれない。

## 2. 住民がものづくりを通して健康になれる地域づくり

講座終了後にもものづくりグループが発足し、地域住民が継続してものづくりを楽しめる地域の資源が増えたことは、本講座の成果の1つである。意味のある作業への参加をサポートする地域資源が増えることは、地域住民の健康増進につながる。世界保健機構が1986年に発表したヘルスプロモーションのためのオタワ憲章では、人々の健康を促進するための行動戦略を挙げている(WHO, 1986)。行動戦略には健康的な公共政策作り、健康を支援する環境作り、地域活動の強化、個人技能の開発、健康関連サービスの方向転換、未来に向けた動きという6つが含まれている。健康を支援する環境作りでは、健康の源となる仕事や余暇を満足して行える生活環境を作ることが重要であるとされている。Wilcock (2003) はそれぞれの行動戦略に沿って作業療法士の役割を整理し、作業療法士が環境に注意を向け、作業に参加しやすい環境を作ることによって人々の健康や安寧を促進できると述べている。今回、講座で行ったものづくりが継続的な活動となり、住民がものづくりに参加できる場が増えたことは、住民の健康を増進する環境作りに貢献できたと考える。

今後、ものづくりグループの活動を発展させていくためには、住民や行政の協力を得て活動しやすい環境を作っていく必要がある。人々がどの作業にどのように参加できるかは、国や地域の政策、文化、資源が影響する。社会の構造が人々の作業への参加に影響を与えることを示したモデルの1つに、作業的公正の枠組みがある(Polatajko 他, 2007)。この枠組みでは、経済のタイプ、国家と国際的政策、政策の価値観、文化的価値観といった要因が基盤となり、地域資源、収入、雇用などの作業を行うための手段やプログラムを決定づけるとしている。これらの構造的要因が個人の社会的、文化的背景を介して、作業への参加に影響を与えるとされている。つまり、すべて人々が自分や社会にとって意味のある作業を選び、バランスよく行えるためには、公共政策やその基盤となっている価値観を変え、作業に必要な物理的環境やサービスを整備していく必要がある。そのための方法として、Wilcock (2006) は当事者と共に研究し、その結果を公表し、住民の教育や行政との交渉を行い、活動の振り返りと展開をするというアクション・リサーチを提案している。また Whiteford と Townsend (2011) は Participatory Occupational Justice Framework (POJF2010) の中で、すべ

ての人が意味のある作業に参加できる社会を作っていくために必要な6つのプロセスを挙げている。それらは、作業的不公正に気付くこと、パートナーと協働すること、計画を調整すること、資源を見つける戦略を立てること、計画の実行と継続的な評価をすること、代弁することを促し計画を継続あるいは終了することである。両者とも、当事者と協働し、活動の実行、評価、修正をし、その成果や必要性を伝え、問題に対する気付きを高め、資源を増やしていくことを強調している。今後は、参加者と共にものづくりグループの活動の成果と課題を明らかにし、その結果に基づいて活動を発展させ、住民や行政に活動の成果と必要性を伝えていく必要がある。そうすることで、住民や行政の協力が得られ、活動を行うための地域資源が増え、ものづくりを通して住民が健康になれる地域が実現していくと考える。

## 文献

- Ballinger, M. L., Talbot, L. A. & Verrinder, G. K. (2009). More than a place to do woodwork: A case study of a community-based Men's Shed. *Journal of Men's Health*, 6, 20-27.
- Bedding, S. & Sadlo, G. (2008). Retired people's experience of participation in art classes. *British Journal of Occupational Therapy*, 71, 371-378.
- Dickie, V. A. (2003). The role of learning in quilt making. *Journal of Occupational Science*, 10, 120-129.
- Dickie, V. A. (2011). Experiencing therapy through doing: Making quilts. *OTJR: Occupation, Participation and Health*, 31, 209-215.
- Fildes, D., Cass, Y., Wallner, F. & Owen, A. (2010). Shedding light on men: The Building Healthy Men Project. *Journal of Men's Health*, 7, 233-240.
- 藤本隆宏, 新宅純二郎, 善本哲夫 (2009). ものづくり経営の今後. *Panasonic Technical Journal*, 55, 36-41.
- Griffiths, S. (2008). The experience of creative activity as a treatment medium. *Journal of Mental Health*, 17, 49-63.
- 日本学術会議 (2008). 報告-21世紀ものづくり科学のあり方について-。<<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-16.html>> 参照日 2013.5.7
- 日経ビジネスオンライン (2011). 社会を映し出すコトバたち: バブル崩壊が「ものづくり」の見直しを導いた。<<http://business.nikkeibp.co.jp/article/topics/20110920/222717/?rt=nocnt>> 参照日 2013.8.7
- Ormsby, J., Stanley, M. & Jaworski, K. (2010). Older men's participation in community-based men's sheds programmes.



- Health and Social Care in the Community*, 18, 607-613.
- Perruzza, N. & Kinsella, E. A. (2010). Creative arts occupations in therapeutic practice: a review of the literature. *British Journal of Occupational Therapy*, 73, 261-268.
- Polatajko, H. J., Molke, D., Baptiste, S., Doble, S., Santha, J. C., et al. (吉川ひろみ・訳) (2011). 作業科学: 作業療法の必須要件. In Townsend, E. A. & Polatajko, H. J. (Eds.) (吉川ひろみ, 吉野英子・監訳), *続・作業療法の視点: 作業を通しての健康と公正*. 大学教育出版, pp.90-113.
- Pollanen, S. (2013). The meaning of craft: Craft makers' descriptions of craft as an occupation. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 20, 217-227.
- Reynolds, F. (1997). Coping with chronic illness and disability through creative needlecraft. *British Journal of Occupational Therapy*, 60, 352-356.
- Reynolds, F. (2000). Managing depression through needlecraft creative activities: A qualitative study. *The Arts in Psychotherapy*, 27, 107-114.
- Reynolds, F. & Prior, S. (2003). 'A lifestyle coat-hanger': A phenomenological study of the meanings of artwork for women coping with chronic illness and disability. *Disability and Rehabilitation*, 25, 785-794.
- Riley, J. (2008). Weaving an enhanced sense of self and a collective sense of self through creative textile-making. *Journal of Occupational Science*, 15, 63-73.
- 高木雅之, 吉川ひろみ, 石丸進 (2012). 健康な高齢者にとってのものづくりの影響. *作業科学研究* 6, 50-52.
- Tzanidaki, D. & Reynolds, F. (2011). Exploring the meanings of making traditional arts and crafts among older women in Crete, using interpretative phenomenological analysis. *British Journal of Occupational Therapy*, 74, 375-382.
- Whiteford, G. & Townsend, E. (2011). Participatory Occupational Justice Framework (POJF2010): Enabling occupational participation and inclusion. In Kronenberg, F., Pollard, N. & Sakellariou, D. (Eds.), *Occupational Therapies Without Borders Vol.2. Towards an ecology of occupation-based practices*. Churchill Livingstone Elsevier, Philadelphia, pp.65-84.
- Wilcock, A. A. (2003). Population interventions focused on health for all. In Crepeau, E. B., Cohn, E. S. & Schell, B. A. (Eds.), *Willard and Spackman's Occupational Therapy 10th ed.* Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, pp.30-45.
- Wilcock, A. A. (2006). *An Occupational Perspective of Health 2nd ed.* Slack, Thorofare.
- World Health Organization, Health and Welfare Canada & Canadian Public Health Association. (1986). *Ottawa charter for health promotion*. Ottawa, Canada.
- 吉川ひろみ (2008). 「作業」って何だろう. 医歯薬出版

【原稿受理：2013年9月10日】